

小学生の社会的責任目標とクラス環境および学校適応感との関連

－学年差に注目した検討－

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
発達・福祉臨床クラスター
安田 祥子

本研究では、小学生の社会的責任目標の発達とその影響の違いについて継続的に検討する重要性を指摘した上で、研究1では、児童たちが持つ「きまり意識」や「思いやり」の目標や学級環境への意識、学校適応の諸側面について、A府内の公立小学校3年生、5年生、6年生の児童を対象として質問紙調査を実施し、学年間の比較検討を行った。さらに、研究2では、研究1で対象とした3学年の児童に加え、同校において、2011年に同様の質問紙調査を実施した際に協力を得た3年生、6年生（調査時）の児童を対象とし、時代差（2011年と2013年）に注目して比較検討を行うことを目的とした。

研究1では、6年生になるときまり意識に関する目標や学級全体の「協同」、学習への意欲が低くなること、そして学年が上がるにつれて、教師との関係や学習を大切だと思ふ気持ちが低くなることが示唆された。一方、他者を思いやる気持ちや学びへの自信、学校への関心は、小学校の時期において比較的安定したものである傾向が認められた。また、各学年ともに、児童同士が互いに協力して助けあいながら学級活動に取り組むことが促進される学級では、きまり意識や思いやりの目標が育まれ、特に、思いやりの目標に良い効果をもたらすことが示された。さらに、育まれた児童たちの目標は、学校における人間関係や学習、生活など適応の諸側面に良い影響を与えることが見出された。そして、学年が上がるにつれて、学校適応の諸側面により影響を与える目標意識は「思いやり」から「きまり意識」へと変化していくことが示された。また、学年が上がるにつれて、学級全体の「協同」と各適応感との関連や適応感の尺度間の関連は低くなる傾向が認められた。学年が上がると、学習が高度になり、学習に対して苦手意識を持つ児童が増えることや、人間関係もより複雑になり、学級全体の友人関係から仲良しグループといった少人数の友人関係へと移行していくことなどから、児童の目標や適応感に対する価値観や関連も変化していくと考えられる。

研究2では、同一学年の児童たちが持つ目標意識や学級全体の協同、学校における適応感は、教室における対人関係など児童を取り巻く様々な要因による影響も受けるが、時代を問わずある程度同様の傾向を持つことが示された。さらに、3年生で児童たちに育まれた目標意識や適応感が、同じ学年集団で学校生活を送ることで5年生までは持続される可能性が示唆された。

今後、質的な調査を含め、縦断的に小学生の社会的責任目標の発達や適応感を捉えることで、さらに学校現場に寄り添った研究を行うことが期待される。